

林芙美子——自立した女性の姿の研究

はじめに

花のいのちは

みじかくて

苦しきことのみ

多かりき

林芙美子のとても有名な詩である。これは林芙美子の一生の美しさと切なさを象徴する一番適切な詩であろうと思われる。

林芙美子は、昭和二六年（一九五二）六月二八日の夜、急死した。

七月一日に自宅で行われた告別式には、東京の下町から駆け付けたおかみさんや、また、エプロン姿に買い物籠をさげた女などもまじって、長い列がつづいた。

葬式の当日、葬儀委員長の川端康成が、

故人は自分の文学的生命を保つため、他に対して、時にはひどいこともしたのでありますが、しかし、後二、三時間もすれば、

故人は灰となってしまう。死は一切の罪悪を消滅させます

から、どうかこの際、故人を許して貰いたいと思います

と弔辞を述べた。（末木節子「林芙美子の生命観」『総合看護』二〇〇五年二月、七五頁）

川端康成の言う「ひどいこと」とは、例えば、和田芳恵は『愛の歪み』の「林芙美子さんのこと」の中で、

私はどこにも顔を出すことができないので、林さんに頼んで、どこかの出版社へ原稿を売り込んでもらおうと考えた。

深夜、ひそかに尋ねた私を歓待してくれ「死んだ気になってほんとうのものを書いてごらんなさいよ。よかつたら、どこにでも持って行ってあげるから」と、（中略）

小説を書き、書いては送り続けたが、ナシのつぶてで、一向に林さんからは連絡がなかった。（中略）三十五日の忌日に呼ばれた席で、林さんの主人が、「芙美子の部屋のあと片づけしていたら、あなたの原稿が、いくつも出てきた」と、言って返してくれた。これらの原稿の中には、送ってから三年もたったものがあ、インクの色があせたりしていたが、ひとつとして封が切られていなかった。（二三四頁、一九六九年、中央大学出版部）

というようなエピソードのことを示すのであろう。

また、『放浪記』の中で林芙美子は野村吉哉と同棲していた時、彼が他の女性と関係がある手紙を家の中で見つけ、その内容を記している。それに対して野村吉哉の妻の野村沢子が抗議している。

あなたの真実の自伝のように思われている放浪記に、どうか嘘をかかないで下さい。あの人もきつとこころのなかで淋しがっ

ているに違いありません。『温泉へ行きたいわね、とか。あの夜泊つてからの私は』などという事実もありませんでしたし、またそんな六銭切手の手紙を書いたことは一度だってありません。(野村沢子「林芙美子伝の事実のために」『新潮』昭和三五年一〇月、八三頁)

これに対して林芙美子はつぎのような返事をしたという。

私は、あんなことでも書かなければ食べて行くことができないのです。どうかわるくおもわないで。笑ってながしてやつて下さい。(同、八三頁)

林芙美子はその死とともに、人々に愛されたり、嫌われたりした一生の業績と過失が改めて評価され始めた。林芙美子は性格が他人と特異で、作品も独自の一派をなしている。その多彩な精神世界は後代の人々に尊重されるとともにその非凡で薄幸な人生は多くの研究者にさまざまな課題を残した。

出生の問題

林芙美子研究の問題点として先ず誕生日についての幾つかの説があることを挙げるができる。

(一) 戸籍では明治三十六年(一九〇三)の一月三十一日出生と記している。和田芳恵は『愛の歪み』の中でこれについて、

十二月三十一日生まれとして届けると、数え年を採用していたころだから、ただ、一日のこと、二つになつてしまふ。女の子の場合、結婚を考えて、こんな場合には、翌年の一月に生まれたことにするのがしきたりであつた。

と指摘している。和田芳恵は、数え年を使われていた時代では、二月三十一日に生まれだと翌日に二歳になつてしまうので、翌年の一月生まれにするのが一般的であつたというのである。

現在の林芙美子研究ではほとんど戸籍記録の生年月日を使っている。

(二) 林芙美子自身は『放浪記』の中で五月の生まれと書いている。これを踏まえて平林たい子は『林芙美子』の中で「世界が自分を照らした陽光の温かさを、その五月という月で語りたかつたのもあろうか。」と語っている。(『林芙美子』一四頁、新潮社、一九六九年) また林芙美子は『一人の生涯 その他』(昭和二六年、改造社)の中に次のように記している。

私はほんとうは五月に生れたのだそうです。朝十時頃、力屋の二階で生れたのだそうです。産婆さんもうらないほど、かるい産だつたと、母は云っていました。誰にも迷惑をかけないで生れたことは、私らしいと母が冗談に云いますけれど、そうかも知れません。(二六四頁)

しかし、『放浪記』の「放浪記以前」に次のようにある。

八つの時、私の可憐な人生にも、暴風を孕むようになった。若松で、太物の雑売りをして、かなり財産をつくっている父は、長崎の沖の、天草から逃げて来た、浜と云う芸者と一緒になると、雪の降る旧正月を最後として、母は私を連れて家を出てしまった。(『放浪記』四頁、近代文学館複製版)

数え年で数えると明治四三年のこの時は八歳である。川本三郎の『林芙美子の昭和』『林芙美子 人と作品15』など現在の研究ではこれを満年齢で七歳としている。

(三) 六月生まれという説もある。平林たい子が『林芙美子』で「お母さんは六月に生まれたとどこかで語っている」と記している。(前掲、一四頁)川本三郎はこれをふまえて『林芙美子の昭和』で「母キクは六月生まれと平林たい子に語り」と記している。

林芙美子の出生について前述したような色々な説がある。このように幾つかの説が出る原因として林芙美子の出生に関わる問題があつたと考えられる。

また福田清人と遠藤充彦編纂の『林芙美子人と作品15』に、人間だれでも自分の生年月日を知らないなどということは考えられないから、彼女も承知して書いて書いていたものと思われる。

此の林芙美子の心理は彼女のいない今日知るべくもないが、女性には時として年齢を若くいたりすることがあるし、芙美子もそんな心理だったのかもしれない。また、作家には空想と現実をないまぜにしているような人が見られるが、芙美子にも往々にして同じような状態があったといわれる。(一九六六年、清水書院、九頁)

と記しているように、林芙美子自身の心理的な要素があるとも言える。

林芙美子自身が『読書遍歴』のなかに、
系図は夢だ。系図がなぜ大切か私には判らない。人間は只永遠に生まれ出て来ている。私は戸籍では私生子だけれども、恥ずかしいと思つた事は一度もない。悩んだ事もない。只赤ん坊として生まれて来たのも、それだけだ。生まれて来た以上は生きなければならぬ。私は天のぬぼこのをかしみを深く信じるだけだ。

と記録していることを和田芳恵は指摘している。(前掲書、二二六頁)
林芙美子は自己認識が非常に客観的であることがわかる。人は生まれや身分を選択することができないけれども、生まれて来たからこそ生きなければならぬと認識している。林芙美子としては生まれが確かに大事だけれども、生きることがそれよりも重要だと思つているからこそ、出生のことにほとんど気に掛けなかつたと考えられる。

『放浪記』研究の課題

林芙美子研究の問題点のもう一つは、初期の代表作の『放浪記』の構成であり、これが林芙美子の精神世界を理解する一つの通り道だと考えられる。もちろん他に優れた作品がたくさんあるが、林芙美子にとって出世作である『放浪記』には作家自身としても特別な感情があつたようである。

『放浪記』は昭和五年(一九三〇)の七月に改造社から「新鋭文学叢書」の一冊として刊行され、わずか二カ月で四十版を重ねる大ベストセラーとなった。同じ年の十一月には『続放浪記』が刊行された。さらに『放浪記・決定版』が昭和十四年(一九三九)十一月に大幅な修正が加えられ新潮社から刊行された。

昭和二年(一九四七)の五月から『放浪記・第三部』が『日本小説』に連載され、昭和四年(一九四九)に『放浪記・第三部』が単行本として刊行された。昭和五年(一九五〇)年の六月、中央公論社から全三部を収めた『放浪記』が刊行され現在の形が整えることになった。

林芙美子は無名の庶民から有名な作家になった。林芙美子は単行本が出版された際の喜びを次のように回想している。

そして間もなく、私の処女出版が出版しました。私の内部には新しい生活運動が起り始めています。このよるこびを私は誰に報告をしたらいいでしょう。灰色だった私の生活は急に明るくなり、私の体は精悍な馬のような元気をとり戻してきました。私は私と同じ位の年齢にある友人を一人ほしいと思いはじめ、何も彼も話しあえる美しい友人をしみじみと求める気持ちでした。(前掲『一人の生涯 その他』三二二頁)

また中村光夫は林芙美子自身の言葉を紹介してつぎのように語っている。

彼女自身もこの作品には生涯強い自信と愛着を持ちつづけていたらしく、「私の作品が私の死後残るなどとは思わないけれども、此の『放浪記』だけは折にふれて誰かの共感を呼ぶに足るものであると自信を持っている。」と、戦後になってから書いています。(『林芙美子』『作家論集3』一三五頁、講談社、昭和四三年五月)

『放浪記』がこのように大成功した背景として川本三郎は次のように述べている。

東京の人口の急増、地方から若年労働者の増加があつことは違

いありません。(中略)若く、無名で、貧しい若い女性が、素手で大都市のなかを生きてゆく。その姿が、大勢の上京者に共感を与えたはずです。(川本三郎「新しい町の空気を存分に吸った林芙美子 貧しさのなかの底抜けの明るさ」『望星』二〇〇九年一月一八—二四頁)

また森英一は、

『放浪記』は職業婦人である(私)の職業遍歴を描いた作品とみることが可能である。特に紙幅からいってカフェー女給に至るまでの遍歴を描いたものともみられる。職業婦人が社会的にも話題の対象となっていた当時、その内実を記した『放浪記』が多数の読者を獲得した理由はこの辺にもあるのではないか。

(『放浪記』論——その基礎的研究——)『金沢大学教育学部紀要(人文・社会科学編)』昭和五九年、二九頁)

和田芳恵は林芙美子研究における『放浪記』の重要性を次のように強調している。

私は、やはり、林芙美子研究のポイントは「放浪記」にあるように思われる(中略)正確な「年譜」を一方に作りながら、厳正に「放浪記」を、年、月にしたがったものを整えることが、最初の仕事のように考えられる。(前掲書、二二九頁)

多くの研究者は林芙美子の作品について、その生命観、女性観、男性観、宗教観、思想などの視点から研究を行っている。しかし、この多様な研究の中でどれも『放浪記』にたいする言及はわずかである。『放浪記』の構成についての研究はさらに少ない。

したがって、これ以後『放浪記』の構成を明らかにすることを通して、林芙美子の積極的な自立する精神の研究を行うことにした。

『女人芸術』について

林芙美子は、大正十一年(一九二二)から大正十五年(一九二六)まで五年にわたって書きためた日記の中から抜粋して、『女人芸術』

に昭和三年一〇月より連載した。

『女人芸術』は長谷川時雨が主宰して昭和三年(一九二八)七月から昭和七年(一九三二)六月まで四八冊を出した女性文芸雑誌である。雑誌創刊の動機について高見順は『昭和文学盛衰史 上』において、

女性の主張や表現のための、そして彼女の当時好んで口にした言い方によれば「女性進出」のための舞台を、女性自らの手で持ちたいとする純粋なものがあつたと思われるからである。(二九〇頁、福武書店版)

と述べている。『女人芸術』は青鞥運動の流れとも見られていて、当時の青鞥派の作家たちをも加えていた。その中で平林たい子は創刊号から作品を載せていたが、林芙美子はまだ無名の詩人であった。

はじめは小説、詩歌、随筆、評論などの文芸色が強く、各界の人氣者番付、恋愛座談会などの娯楽記事も掲載されていた。しかし、途次の風潮に乗って次第に左傾化して、ソヴェエトの紹介、労働運動、農民運動、国際問題の記事、読者の手記やルポルターージュが増えていった。昭和五年(一九三〇年)五月号、同六月号は発売禁止処分になされた。昭和六年(一九三一)一〇月号が発禁になり、戦時色が強くなるなか発行を続けたが、翌昭和七年(一九三二)六月号を出したまま突然廃刊した。印刷会社への支払いの滞りと時雨の腎盂炎の悪化とが原因だったという。

『女人芸術』は当時の進歩した女流作家たちに言論の舞台を提供した。平塚雷鳥が「知識婦人に就いての考察」、赤松明子が「夫人参政獲得方法に関する私見」などを載せて、女性解放を呼びかけた。ここに林芙美子の『放浪記』が『女人芸術』に掲載された理由を求めることができる。

初出稿から単行本へ

読売新聞の文化部にながくつとめていた林襄二氏が、芙美子さんのフランス行き送別会で言明した所によると、「放浪記」は、

その頃文化部の机の抽斗の中にあつた。ところが、長谷川時雨女史が夫君三上於菟吉氏の支援によつて「女人芸術」を発刊したとき、三上氏がその原稿の話をきいて興味をもつたので、芙美子さんは、それを読売から取り戻して、女人芸術社にもつていつた。(平林たい子前掲書、一〇八頁)

林芙美子が持ち込んだ原稿が『読売新聞』の引出の中埋もれていたのを『女人芸術』の主宰者長谷川時雨の夫三上於菟吉が見出したということのようである。

『放浪記』は昭和三年(一九二八)一〇月一日発行の『女人芸術』第一巻第四号に「秋が来たんだー放浪記」が掲載され、以後二十回にわたつて、五年(一九三〇)一〇月号の「女アパツシュー放浪記」に至るまで連載される。和田芳恵によれば、サブタイトルに「放浪記」とつけたのは三上於菟吉であつたという。(前掲『林芙美子とその時代』)

改造社で「新鋭文学叢書」の企てがあつて『放浪記』はその一巻として単行本化される。しかし、『女人芸術』初出稿と単行本とは内容の順番に異同がある。

まず単行本では冒頭に「放浪記以前——序にかえて——」として『改造』昭和四年(一九三九)一〇月号に掲載された「九州炭坑街放浪記」が置かれている。

つぎに題名については「淫売婦と飯屋」が「飯屋と淫売婦」に変えられた以外は初出稿のままになっている。

もつとも大きな変更は配列である。

『女人芸術』で「赤いスリッパ」の後記で林芙美子自身が、日記が転々と飛びますが、その月の雑誌にじっくりしたものを書いて書いておきますので、後日、一冊の本にする時もありましたならば、順序よくまとめて出したいと思つております。——

筆者——『女人芸術』(復刻版)五一頁、不二出版、一九八七年)

と記しているように、雑誌発行の季節に合わせて日記の中からランダムに抜き出して発表したということが分かる。また『女人芸術』

に連載のときから『放浪記』を後日一冊の本にする希望をもつていたことが分かる。

従つて、森英一が、

これを信ずるとするならば、単行本は単純に年月順に並べ変えただけと判断できる。しかし、後に述べるように、年月順を無視した意図的配列も一部に存在するようである。(前掲『放浪記』論——その基礎的研究——二四頁)

と述べているように、単行本は時間の流れに沿つて並べ替へたものと考えられる。

尾形明子も次のように書いています。

「女人芸術」連載二十回中の十四回に、「放浪記以前——序にかへて」を加え、「淫売婦と飯屋」を「飯屋と淫売婦」に直した他は、加筆、訂正もなく初出のままに、順番のみを、おそらくは日記に記されたもの形に戻してまとめる。題名もそのままである。(『林芙美子』「解説」二九八頁、一九九四年、日本図書センター)

従来の研究では、ほぼ年月順に再構成したというのが一般的な理解のようである。

しかし、年月順を無視した意図的配列が存在しているのも事実であり、この点を分析することによつて『放浪記』の構成に込めた作家の真の意図を理解することができると思われる。

はじめに、初出稿の連載の月と日記の日付を比べてみよう。

昭和三年一〇月号掲載の「秋が来たんだ」は日記の日付が「十月×日」で始まつている。

昭和三年一〇月号掲載の「濁り酒」は日付が「十月×日」から始まり、内容のほとんどが「十一月×日」になっている。

昭和三年一二月号掲載の「一人旅」は日付のすべてが「十二月×日」になっている。

以下昭和四年一月号掲載の「古創」、昭和四年五月号掲載の「粗忽者の涙」、昭和四年九月号掲載の「三白草の花」、昭和四年一二月号掲載の「目標を消す」、昭和五年四月号掲載の「裸になつて」、

昭和五年七月号掲載の「雷雨」などは、いずれも日記の日付が連載された月と同じになっている。

昭和四年四月掲載の「赤いスリッパ」は日記の日付が「五月×日」から始まっている。同じく昭和四年六月掲載の「女の吸殻」は日記の日付が「七月×日」から始まっている。昭和四年十一月掲載の「秋の唇」、昭和五年八月掲載の「海の祭」、昭和五年五月掲載の「旅の古里」など、いずれも発表された月と日記の日付が前か後一か月の差がある。

これに対して「下谷の家」、「百面相」、「淫売婦と飯屋」、「女のアップッシュ」、「酒屋の二階」、「寝床のない女」などの発表された年月の順と日記の日付が全く異なっている。

以上『女人芸術』に連載された二十篇の作品を分析してみると、林芙美子自身が書いているように、三分の二の作品は雑誌の発行月に合わせて日記の中から抜き出したと考えられる。しかし、三分の一は日付が合っていない。

単行本での時間の流れ

次に、単行本における内容の時間の流れについて検討してみる。

第一章「淫売婦と飯屋」では、林芙美子が小説家、評論家の近松秋江の自宅で女中として二週間あまり奉公したのち神田の職業紹介所へ行ったことが書かれている。この事実を川本三郎の『林芙美子の昭和』は大正一三年（一九二四）のことであるとされている。

第二章「裸になつて」では、林芙美子が東京で母の林キクとともに二人で行商したり、露天の店を出したり、祖母をお見舞いに行ったりしたことが書かれている。これは初めて東京に来た時のことである。大正一一年（一九二二）だということが分かる。

第三章「目標を消す」では、林芙美子が「十一月×日」にセルロイドの工場で働いていることと松田さんについて書かれている。これは、大正一三年だと分かる。

第四章「百面相」では、林芙美子が三月に新劇俳優の田辺若男と

田端で同棲したことが書かれている。六月に田辺に愛人ができて二人は別れた。大正一三年のことである。

第五章「赤いスリッパ」では、林芙美子が高松の宿屋で田辺若男から「スグコイカネイルカ」という電報を貰い、嬉しくて男の宿屋へ行ったが、男と愛人といふのを見て非常に悲しく思ったこと、また吉田さんという人が林芙美子を愛していることも書かれている。林芙美子が田辺若男と別れたのは大正一三年六月である。

第六章「粗忽者の涙」では、「私も夫も壺井さんの話は非常にうらやましかった」と書かれている。『放浪記』の中で林芙美子が「夫」と呼んでいるのは野村吉哉だから、これは野村吉哉と同棲していた大正一四年（一九二五）のことである。

第七章「雷雨」では、カフェで女中をしていて松さんに頼んで郊外へ車で行ったことが書かれている。何年かは今のところは不明である。

第八章「秋が来たんだ」では、初出稿の一四頁では「直哉の『和解』がささくれてボサリとしている」とあり、二二二頁では「暗がりの風呂敷の中に、私は直哉の『和解』を思い出した。」とあり、「雷雨」に書かれている内容と同時期のことであると考えられる。両方ともカフェでの色々な出来事が書かれている。何年かは不明である。

第九章「濁り酒」では、初ちゃんと君ちゃんと一緒にいた頃のことと書かれている。何年かは不明である。

第十章「一人旅」では、君ちゃんと二人で仕事を探しに横浜へ行ったことと、徳島へ帰った頃のことと書かれている。その時林芙美子の母は徳島で旅人宿をやっていた。これは大正一五年（一九二六）年（一九二六）のことであると考えられる。

林芙美子は『放浪記』の期間中に三回尾道に帰郷している。林芙美子が初めて帰郷したのは岡野軍一と別れた大正一二年（一九二三）である。九月の関東大震災の後に避難船に乗って大阪を経て、尾道へ帰り、四国で両親と落ち合っている。二回目に帰郷したのは大正

一五年〓昭和元年（一九二六）一〇月である。最後の一回は昭和二年（一九二七）の七月、緑敏と尾道に行き、因島の岡野軍一を訪ねた後、当時高松にいた両親に緑敏を紹介し、一カ月程滞在する。それで、今回も一人旅ではない事と、両親と一緒にいた事を分かる。

ここでは他に参考になることが書かれてない。しかし、しかし、一七三頁「あの人」が野村吉哉の出来たとて、それが何であろう」とあり、「あの人」が野村吉哉のことと考えられること、そして一八三頁に「北海道に行ってもう四カ月余り、遠くに走りすぎて商売も思うようになく、四国へ帰るのは来春だと云う父の頼りが来てこつちも随分寒くなった」と書かれていることから、これが林芙美子が両親と分かれて暮らしていたことであることがわかる。

これらのことから、「一人旅」に書かれている尾道への旅は第二回目の大正一五年〓昭和元年（一九二六）の帰郷であると推測される。

第一章「古創」では、大阪で働いていて、京都で夏ちゃんといに行つたことが書かれている。何年かは不明である。

第二章「女の吸殻」では、林芙美子が野村吉哉と別れてカフェーで勤めている。野村の下宿で曖昧な手紙を見て「別にもうあの男に稼いでやる必要もない故、久しぶりに古里の汐っぱい風邪を浴びようかしら。ああでも可哀想なあの人よ」と考え「高松行きの三等切符をかった。やっぱり国へ帰りましょう。」と帰郷した。これは大正一五年〓昭和元年のことである。

第三章「秋の唇」では、静栄さんと母親に手紙を書いて自分の寂しい心と人生について考えた事が書かれている。手紙の末尾に「たいさんも裏で働いています」とある。林芙美子は野村吉哉と別れてから、平林たい子と同居した。その時平林たい子が飯田徳太郎と別れていた頃だった。これが大正一五年〓昭和元年のことであることがわかる。

第四章「下谷の家」では、林芙美子が野村吉哉と別れてから、平林たい子との下宿、本郷区追分町の大黒居酒屋の二階に同居した。間もなく平林たい子が小堀甚二と結婚した。その年は昭和二年（一九二七）である。

以上の『放浪記』の上篇の内容を分析してみた結果として次のようなことが分かった。

第一に、構成がほとんど時間の流れにそっている。最初の「淫売婦と飯屋」が大正一三年であり、「目標を消す」も大正一三年であり、内容としても林芙美子の東京での出会いが最初近松秋江の家で女中として働いていたこと、セルロイドの工場で務めていたこと、田辺若男と同棲し、また別れたこと、野村吉哉と同棲し、別れてから平林たい子のところで同居したこと、いわゆる大正一三年から昭和二年までの出会いと別れが次第に記されている。林芙美子自身の稿の『放浪記』を単行本にする時に自らの人生の流れを物語の流れと一致させる叙述方法で構成したと考えられる。

しかし、初恋のことは「私を捨てた島の男へ、たよりにならない長い手紙を書いた」というただ一個所である。（二六頁）

第二に、しかし時間の流れと齟齬している部分もある。第二章「裸になつて」は大正一一年のことが記されている。時間の流れがここで逆戻りしている。

第三に、今のところ時期を特定できないものがいくつもある。林芙美子が内容を豊かにするために挿入したものと考えられる。ここで、その理由について考えてみる。

初出稿掲載誌『女人芸術』は女性解放を呼びかけていた青鞥派の雑誌であり、林芙美子は作品は進歩した女性の姿を表現した内容でなければならぬと考えたはずである。また、単行本は改造社の「新鋭文学叢書」の一冊として刊行された。それは新しい文学を象徴するような作品でなければならぬであった。このような要求に林芙美子は敏感に対応したはずである。

時期が特定できない「雷雨」「秋が来たんだ」「濁り酒」「古創」はいずれも女給をして生活を支えて生きていたことが書かれている。これは新時代の女性の姿、自立の精神を伝えたかったという可

能性もある。

自立

ここで単行本から林芙美子の自立の精神を表現した部分を指摘する。

『放浪記』では一五篇のうち九篇に女給の話が書かれている。その時代背景について以下の指摘がある。

第一次大戦後「職業婦人」という言葉が登場してくる。職業婦人という女子労働者の職業範囲は従来の農村や工場での労働とは別の職業を指していた。奥むめおは職業婦人の範囲を「普通一般に解釈されている範疇に従ってタイプピスト、事務員、小学校教員、図書館員、官公使、車掌、女給、モデル、看護婦、薬剤師、ガイド、運転手、産婆、製図師、保母、交換手、店員、ガソリンガール、マネキン、ダンサー等の職業的勤務に従事している被傭婦人」がある。(中略)

男性の職域を侵すことなく、職種は限定され短期であり臨時であり補助的労働者であり、単純な機械的な交代可能は経験を要さない職種に就く者が多い。自ら未婚が圧倒的に多く結婚退職は当然であり、したがって一般的には低賃金であった。(磯村英一、一番ヶ瀬康子、原田伴彦『講座差別と人種』女性』七〇頁、雄山閣、一九八五年)

社会的な雰囲気や男女平等の自由な環境ができてないうえ、従来の良妻賢母の意思が濃かった女性認識などの影響で職業婦人が依然として軽視や蔑視されて、女性自立はなかなか難しかったようだ。しかし、職業婦人のなかで意志の強い女性たちがいた。彼女たちは自分なりの人生を創り出そうといういろいろな困難に向き合って努力している様子がその大正時代の女性解放運動の一つの流れとなったのである。

「下谷の家」から時ちゃんと林芙美子との会話を引く。

大正一五年〓昭和元年(一九二六)、林芙美子は野村吉哉と別れて、

平林たい子の下宿、本郷区追分町の大黒酒店の二階に同居することになる。しかし、間もなく平林たい子が結婚したため、女給の知り合いの時ちゃんと同居する。

最初は、

大丈夫ってばさ、明日から、うんと働くから芙美ちゃん元気を出して勉強して。浅草を止めて、日比谷あたりのカフェーなら通いでいいだろうと思うの、酒の客が多いんだって……。という時ちゃんに対して、「当分二人でみっちり働こうね。ほんとに元気を出して……。」と林芙美子も励ましていた。「雑色のお母さんのところへは参拾円も送ればいいんだから。」と二人とも原稿料がはいるんだから、沈黙って働けばいいのね。」と二人とも元気を出して働くという意志が強くあった。(『放浪記』二四七頁)

しかし、あれからいつも夜の十二時頃に帰って来る時ちゃんは夜遅くまでなつても帰ってこない状況が数日続いた。ある日の三時頃に、酔っ払って帰ってきた。そして「時ちゃん、その指輪どうして……。」、「紫のコートは……。」、「……。」、「時ちゃんは貧乏が厭になつてしまった？」という問には答えがなかった。(二五五頁)

時ちゃんが帰らなくなつて五日目、林芙美子は、彼の女はあんな指輪や、紫のコートのおとりに負けてしまった。あんなに貧乏はけつして恥じゃあないと云つてあるのに……。(二五六頁)

と泣きたい気持ちで思った。

間もなく、時ちゃんから一通の手紙が届いた。「芙美子さま。何も云わないでかんにんして下さい。指輪をもらった人に強迫されて、浅草の待合に居ます。妻君があるんですけど、それは出してもいいって云うんです。笑わないで下さい。その人は請負師で、今四十二です。着物を沢山こしらえてくれましたの(中略)。私嬉しいんです。」(二五七頁)

林芙美子にとって時ちゃんのことには受け入れがたいことであるが、自分が「金貳拾參円也！童話の稿料。当分ひもじいめをしなくてすむ。」（二五九頁）とひとり生活が続けていく。

時ちゃんは女給をしながら自立して生きていく勇氣に満ちていたが、結局意志が弱くて、男の頼りで生きてゆく道を踏んで行ってしまった。これは林芙美子が飢えの日々が続いても、自分の力で生きていく生命力と比較対象になっている。林芙美子は正面的な描写ばかりではなくこのような比較の描写を通して、女性が不幸な運命と戦って、自立して生きていくべきだということを伝えたかったのである。

また「百面相」のなかに次のような記述がある。

私も今日から通いでお勤めだ。

男に食わしてもらおう事は、泥を嚙んでいるより辛い。舐のいい仕事よりも、私の探した職業は牛屋の女中さん。

景氣がいいじゃないか、梯子段をトントン上がって行くと、しみじみ美しい歌がうたいたくなる。（『放浪記』七八頁）

林芙美子のうちにも、一人の女として、男に食わしてもらおうという弱い面があるのも確かだ。しかし、

私はむしろ、私の出発点に卑下するものを感じていて、貧しい私は、人に養ってもらおうと云う気持ちをおこしてはならないと思ったりもしたのです。そんなつながりは、妾の生活と何等の変わりもないではないかと思いきえしました。（『一人の生涯その他』二八六頁）

と反省して、その心理的な依存感を乗り越えて「誰にも世話にならないで生きて行こう」と、深夜一二時まで繁盛する牛屋で働きはじめるのである。

事実とフィクション

『放浪記』の内容が事実かどうかについては、すでに冒頭で触れ

たように、疑わしいことが指摘されている。板垣直子は、

「放浪記」は多くの事実を含む自伝であるけれども、同時に自伝の真実とはちがう創作を工夫していることを、重ねて記さなければならぬ。また、芙美子の記憶力は正確でないから、「放浪記」に書かれてある年代なども、そのまま伝記にあてはめてはならないのである。（『林芙美子』一六五頁、昭和三十一年、東京ライフ社）

と指摘している。また、荒垣宏一は、

『放浪記』にある虚構は、たとえば、

○ 日記風の形式に並べた年代月日の順序は事実どおりではない。

○ 登場人物に架空の者があり、虚実とりませぬものである。

○ 書かれた土地や、人物の行動に作為がある。などに注意しなければならぬ。（『放浪記』における林芙美子徳島滞在確定日について『四国女子大学紀要』昭和六二年、二頁）

と述べている。

らかにした。

しかし、確かに内容としては全く事実とは言えない。事例として言えば、『放浪記』の中で出てくる野村吉哉についてのあることがフィクションで書き上げた。はじめのところに挙げた事例である。野村と同棲したことが事実だが、別れた後の彼に女ができて、彼の部屋から手紙が見つかって、その手紙の内容についての描写が嘘である。これは一つの事例である。

もう一つの事例を挙げるとしたら、平林たい子の『林芙美子』の中で明らかにした時ちゃんという女給についての描写は適例である。

当時「時ちゃん」だった某夫人の思い出ばなしである。彼女[6]の言うには、時ちゃんについて「放浪記」の記述は大変ちがっている。女給に手紙の代筆をしてやったのは自分だし、必需品を買ったのも自分だった。（平林たい子『林芙美子』新潮社、一九六九

年、九九頁)

これは「全然つくり話であって、根も葉もない話であった」(同、一〇二頁)と平林は明確にしている。

これについて平林たい子は、

芙美子さんの同業者としての私が見れば、時ちゃんという実名で、こんなフィクションをつけ加えたのはたしかにわるかった。別な名前だったら時ちゃんも知らないふりをして居られたのに。(同頁)

だと批判している

註

(1) 林芙美子が好んで色紙に書いたといわれている詩のフレーズ。

(2) 平林たい子は『林芙美子』で「因に、「放浪記」は、私が知り合った大十三年ころすでに歌日記という題でかきためていた。あの中には古い部分と新しい部分が一緒になっている。」と語っている。(四九頁)

(3) 明治四四年(一九一七)に平塚らいてうを中心^にに結成された青鞥社に属する女流文学者の一派。大正五年(一九一六)に解体。

(4) 小堀甚二は小説家、劇作家、評論家。本名は清寿^{きよしげ}。福島市生まれ。昭和三〇年に(一九五五)平林たい子と離婚している。

(5) 奥むめおは社会事業家、婦人運動家。